

第23回全国大会

(2023年11月18日(土)、於 関西大学千里山キャンパス・Zoom併用)

要 旨

I 研究発表

第一室

1. 静穏の中の運動性—アルバート・ムーア《夢みる人々》(1882)と《夏の夜》(1890)

梶間 里奈(筑波大学大学院)

本発表では、眠ったりまどろんだりする女性像を描いた画家アルバート・ムーアの作品に潜む運動性を明らかにした。《夢みる人々》(1882)では、反復するイメージや同時代に発展したアニメーション機器との関連が見られることを示し、エドワード・バーン=ジョーンズによる《黄金の階段》(1880)と《時》(1882)との比較を行い、本作における時間的・空間的な運動性を指摘した。《夏の夜》(1890)では、バーン=ジョーンズによる《眠り姫》(1873)や古代ギリシャの壺絵、作品の習作との比較を行い、同時代のエドワード・マイブリッジによる連続写真との類似性を示し、本作の中の運動が画面外にまで続いていくことを指摘した。ムーアによる装飾的な画面構成や二次元的画面の外側にまで運動が続いていく表現は、当時の美術界では画期的であり、ムーア独自のモダニズムの存在を示唆した。

2. Astonishment, Terror and Industrial Monsters in the Work of J. M.W. Turner and Charles Dickens.

Neil Addison(日本女子大学)

Charles Dickens portrays industrial machines as demonstrating a personified monstrousness which dwarfs those who constructed them. When the 'Rocket' locomotive made its first commercial journey in 1830 Dickens was only 18 years old, but by 1846 the steam train had appeared in the early

numbers of *Dombey and Son* (1848). Here, the new railway stations were shown transforming their environs, urban development acting ‘like the giant in his travelling boots’ (500). Dickens was greatly influenced by pantomime, which underpinned his aesthetics (Eigner 8), but in *Dombey and Son*, and ‘The Signal-Man’ (1865) his astonishing and monstrous descriptions of trains reflects additional artistic influences. While Dickens was friends with the marine artist Clarkson Stanfield, he was particularly taken with the work of Joseph Mallord William Turner and the artistic legacy of the sublime. During his second visit to the United States in 1867-68 Dickens visited Niagara Falls and wrote a letter to his biographer John Forster in which he admitted that they exceeded even ‘Turner’s finest water-colour drawings…this most affecting and sublime sight’ (*Letters 12 75*). Edmund Burke’s 1757 definition of the sublime included astonishment and terror, qualities which reflect Turner’s paintings of the ocean and Dickens’ depiction of storms (Dennett 1994). Dickens’ representations of steam trains also appear to draw upon the influence of Turner’s industrial paintings such as *Rain, Steam, and Speed – The Great Western Railway* (1844). Turner’s industrial works have been described as encompassing an ‘industrial sublime’ (Rodner 107), and railway transport functions in Dickens’ work as a metaphor for sublime-like astonishment and terror. The ghost story ‘The Signal-Man’ appears to particularly warn Dickens’ readers of the potentially horrific dangers of train travel. While reflecting Dickens’ traumatic first-hand experience of the 1865 Staplehurst railway accident, this unsettling tale also draws upon the artistic legacy of Turner’s ‘industrial sublime’.

第二室

1. 『水の子』の三人の女神に見られるヴィクトリア女王の表象

高 雅麗(慶應義塾大学大学院)

本発表では、チャールズ・キングズリーの『水の子』(1863)に描かれた

女性キャラクターが投影するヴィクトリア女王の表象を考察した。この作品は、ヴィクトリア女王の独特な存在が、その即位後に黄金時代を迎えたファンタジー文学に豊かな想像力の可能性を与えたことを反映していた。ヴィクトリア女王や王室と深い関係があるキングズリーは、ファンタジー世界の女神、ゴッドマザー及び支配者など異なる女性像を通して、現実世界における女王像の多義性を示した。そして結末にはこれらの女性たちが道徳的存在であるMother Careyへ同一化することで、実際のヴィクトリア女王の象徴性を強化していた。さらに、1901年にヴィクトリア女王の逝去を記念して発行された『パンチ』誌の特集号では、「水の子と王室のゴッドマザー」と題されたイラストの中で、ヴィクトリア女王をMother Careyと同一視していた。この関連性はヴィクトリア女王の表象と文学史的動向との相互関係を明らかにした。

2. テムズ川から見るロンドンの〈夜〉の文化史——ヴィクトリア・エンバンクメントの電気街灯導入実験を中心に

橋口 龍也(中央大学大学院)

19世紀後半は、街灯が紆余曲折を経て徐々にガス灯からより明るい電灯へ切り替わり、帝都ロンドンのイメージがさらに近代的なものに変容した時期である。しかし、その最初期であるテムズ川沿いの堤防、ヴィクトリア・エンバンクメントの電気街灯導入実験の内実は十分に検討されてこなかった。本発表では、街灯の設置と管理を行っていた首都土木局(Metropolitan Board of Works)の議事録と、新聞・定期刊行物を手掛かりとして、ロンドンにおける電気街灯導入初期の実態の解明を試みた。パリ万博を契機として1878年に点灯したロンドン初の電気街灯は、市民から肯定的に評価された。その一方、コストの高さや不具合、ガス会社の利益の低下、電力会社と首都土木局間のトラブルといった負の側面も少なからず存在していた。最終的にガス灯に戻されたこの実験の意義は、電気照明の実用性がロンドン市民に広く認識されたこと、実用化に向けた技術的・経済的課題が解明されたことに見出すことができる。

II シンポジウム

ヴィクトリア朝の／と人形(劇)

司会：松本 靖彦（東京理科大学）

マダム・タッソーの蠟人形館が人気を博し、パンチ&ジュディが上演され続けたヴィクトリア朝英國は多様で豊かな人形(劇)文化を有した時代であり、これらの人形を用いた見世物は当時の社会的・文化的価値観を表現したメディアでもあった。

一方、人間は人形を捨てるだけでなく、人形のように扱われてしまう存在もある。あくまで自ら意思決定し、行動しているつもりでいながら、実は何者かに人形のように操られていたという状況も起りうるのだ。このように人物がそれと知らずに生身の「人形劇」に巻き込まれてしまうような事態は、文学作品中の話に留まらず、ヴィクトリア朝の錯綜した政治情勢のうちにも見出すことができる。

本シンポジウムでは、まず人形自体が孕む多様なドラマを分析し、次にパンチと映像文化との関わり、また日本人作家のパンチ観について検証した。最後に影の「人形遣い」としてヴィクトリア朝に暗躍したと思われる英国内外の人物たちについて考えた。

1. 動かない人形のドラマ——ディケンズを通してみる人と人形の関わり方

報告：松本 靖彦（東京理科大学）

ヴィクトリア朝には、私的な空間で鑑賞されたり愛玩される人形から、蠟人形館のように公的な空間で展示される人形まで種々雑多な人形が存在し、それら人形たちと、その所有者、観察者、製作者、モデルとなった人物等との間に様々なドラマが生まれていた。本発表では、そのような「動かない」人形をめぐる無言のドラマを看取し、巧みに描写したディケンズ並びにその周辺の書き手の文章を通し、ヴィクトリア朝における人と人形との関り合いの諸相を考察した。受動的に見える人形だが、見る側の一定

の反応を誘発したり、役柄を演じ切る(あるいは裏切る)ことで、ある種の活力を發揮しているといえる。人形は人形遣いが動かさなければ演じたり踊ったりしないわけではなく、動かない今までいても人形同士互いに関わりあつたり、見る者にちよつかいを出さないではいられない存在なのであり、あるがままの動かない状態でも物語を幾重にも身に纏い得る形代なのである。

2. ヴィクトリア朝のパンチ&ジュディ

報告：岩田 託子（中京大学）

現在に至るまで400年近い歴史をもつ英国の人形劇パンチ&ジュディについて、期間をヴィクトリア朝に限定して考察し浮かびあがる特徴から、ヴィクトリア朝文化の一端を示すことがもくろみとしてあった。まず1.木偶性・ストリート性・多彩なキャラクターの登場が、ヴィクトリア朝パンチ&ジュディの際立つ特徴であることを例示した。次いで2.ヴィクトリア朝が世界屈指の幻灯文化を誇り、スクリーン・プラクティスの観点から当然なことに、初期映画においても英国が独自性を發揮したことから、コンテンツ構成要素としてパンチ&ジュディがその諸相に現れる投影例を紹介した。云いかえれば、多彩な投影文化を紹介できるほどに、人形劇を越えて他メディアにパンチ&ジュディは頻繁に登場していたことになる。最後に3.同時代日本人の英國滞在・留学体験が増えたことから、パンチ&ジュディとの接点・反応の記録を紹介し、パンチ&ジュディへの理解・受容に必要な歴史性の認知と本質への洞察力を示唆した。

3. 背後で操るのは誰だ？——『パンチ』誌から眺めるインド大反乱

報告：加藤 匠（明治大学）

ヴィクトリア朝期に起こった戦争の中でも、インド大反乱ほどイギリス国民に特に強い衝撃をもたらしたものはないだろう。本発表では、『パンチ』

誌およびその周辺のマスメディアが、この反乱をめぐっていかなる表象を展開していたのかについて論じた。特に多くの女性と子どもが犠牲となつたカウンポールでの虐殺に注目し、忠実な下僕であったはずのセポイをはじめとする反乱者を背後で操った首謀者と目されたナーナ・サーヒブに対し、情け容赦ない復讐を叫ぶ声があがるさまを図版や記事を通じて明らかにした。<背後で操る首謀者がいる>という表象はアンソニー・トロロープの『ラムリー牧師館』にも見ることが出来るが、そこでは自身が操っているつもりでも、実際には操られているかもしれないという不安が描かれている。人形と人形遣いというイメージは、政治的な意味合いだけでなく、自分自身の存在の危うさを改めて思い出させるものもあるのだ。

III 特別講演

日本の現代人形劇におけるヴィクトリア朝の影響

報告：鴻見 英明（人形劇の図書館 館長）

日本は古くから人形芝居大国だ。そこに倉橋惣三のギニヨール（片手遣い）による「子どものための人形劇」と、千田是也らの「新興芸術の人形劇」が1923年同時に始まる。これを合わせ「現代人形劇」という。モダニズムの「新興美術運動」が枠を超えた芸術運動として展開し、E・ゴードン・クレイグの「Über Marionette」を日本の若き芸術家たちが最先端の西洋演劇論として受容、その延長線上に誕生したから千田らは「マリオネット」でなければならないのであった。ただ、彼らはその技術を習得できず、逆に人形劇の面白さをシンプルに表現できるギニヨールへと転向していく。

そこから100年だが、その前史として明治期来日の西洋人形劇の影響があったことを注視せねばならない。それが1889年Webb's Royal Marionettes（横浜居留地内の上演）と、1894年のダーク人形座（D'ark Marionettes）であり、ダーク座は歌舞伎が取り入れた程の影響と評判を得て、その後「西洋あやつり」として浅草花やしきで昭和初期まで形を残した。ここにヴィクトリア朝人形劇と日本の現代人形劇の関りを見出すことになる。